

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720077

研究課題名（和文）敗戦直後における日本文学と地方雑誌の関わりについての総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study on correlation between Japanese literature and local magazine after WW II

研究代表者

大原 祐治（OHARA YUJI）

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：40554184

研究成果の概要（和文）：本研究は、占領期に全国各地で数多く刊行されていた地方雑誌を対象とするものである。いくつかの特徴ある地方雑誌について詳しい調査を行い、これらの雑誌が各地に疎開していた作家を取り込み、講演会や懸賞小説のようなイベントを企画しながら、地方文化の確立に寄与していた実態を確認した。全国各地から多角的に情報を発信していたローカルメディアに注目することは、内容に関する批評に傾きがちだった戦後文学に関する旧来の研究に、メディア論的な観点を付け加えるものである。

研究成果の概要（英文）：The target of this study is local magazines that published at over the country on occupied period. Throughout research on several unique local magazines, I recognized that magazine editors often asked for evacuated writers, made plan of lectures and novel contests. Paying attention to local media will bring us the new view point to study on Japanese literature after WW II.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：日本近代文学、メディア、占領期、地方雑誌

1. 研究開始当初の背景

敗戦直後の日本文学に関する研究は近年急速に進みつつあるが、しばしばそれは、特定の文学者・批評家らの言説について、専らその内容の側面から検証し、その（今日的）意義を確認するといった次元に留まってしまうことが少なくない。しかし、かつてないほど活字メディアが渴望され、多くの読者によって文学・思想のことが享受された敗戦直後について考察するためには、言説の

受容と供給の具体的なステージとしてのメディアに関する研究は欠かせない。

しかも、敗戦直後に多く出現したメディアは多種多様にわたり、必ずしも集約的に保存されていないため、いまだその全容は判然としていない状況にある。

2. 研究の目的

本研究の主眼は、敗戦直後の時期、全国各地で大量に刊行されていた地方雑誌の実態

について調査することにある。大小さまざまな規模の雑誌が淘汰されることなく一度に大量に溢れかえるという、日本の出版文化史上においても稀有な時期である占領期を考察の対象とすることで、一部の特権的な作家およびテキストだけに注目するのではなく、メディア環境の面から、文学を捉える視座を確保することが可能となる。

こうした視座を得ることによって、敗戦直後の人々にとって「文学」および「文学者」がいかなる社会的価値を帯びていたのか、そしてその価値が、戦後社会の構築においてどのような批評性を発揮していたか、ということについての実証的な考察を行うことが、本研究の主な目的である。

3. 研究の方法

(1) プランゲ文庫（国立国会図書館蔵）資料を活用した調査

(2) 全国各地の公立図書館・大学図書館に所蔵されている資料の調査

(3) 既に複製版が刊行されている資料に関する調査

(4) 全国各地の古書店に流通している敗戦直後の各種雑誌の収集（購入）。

(5) 上記(1)～(2)の作業によって収集した資料を概観し、その中で特色の明確な雑誌を適宜、ピックアップする。

(6) ピックアップした資料の誌面に関して綿密な調査を行い、総目次および解題を作成する。

(7) 誌面の内容・構成等に関する詳細な検討作業を行う

4. 研究成果

プランゲ文庫所収の資料（マイクロフィルム）を起点としつつ、各地の公立図書館・資料館の調査および古書の収集作業によって、敗戦直後の時期に刊行されていた地方雑誌の刊行と流通の状況について概観することが出来た。その活発な状況は、中野重治が1946年1月の段階で「新日本文学」創刊準備号の中で次のように記していたことを確かに裏付けるものであったと言える。

戦争は文学者を疎開させた。戦争に対する態度奈何にかはらず、東京その他の大都市から地方小都市へそれから農村へと散って行った文学者、作家は少なくない。[...]そこでさういふ作家達に我々は希望する。諸君はどうか仕事を始めて頂きたい。[...]それから、疎開した文学者のゐる土地々々の人人に望みたい。君らの町、君らの村に疎開した文学者はゐないか、誰がゐるか、それをはやく、完全に調べて貰ひたい。さうして、君ら自身、また町の人、村の人も、さういふ作家たちに、文学のことで相談するやうにして

ほしい。（中野重治「疎開した文学者へ、疎開作家のゐる土地の人々へ」

北河賢三が指摘するように（『戦後の出発文化運動・青年団・未亡人』2000年、青木書店）、戦争末期になって各地方に疎開していった文学者たちにとっては、疎開経験そのものが「戦後の作品を生み出す源泉となる」とともに、「地域の要請に応じて文化運動を指導」したり、「生活の資を得るために、地域の新聞や雑誌に原稿を執筆し、諸団体の講演会に講師として出かける」ことが多かった。また、出版および印刷に関しても「かなりの数の出版社・印刷所が地方に疎開」していた。つまり、「戦後文学」を始動させようとする文学者たちにとって、地方を起点とした活動は不可欠だったのである。地方雑誌がまさしく、こうした地方における文化運動の拠点として機能していたことは、こうした雑誌の目次立てや彙報欄、編集後記などからも明らかに窺われる。

しかし、同時に注意すべきことは、こうした地方雑誌を拠点とした文化的活動が、全くゼロの状態から新規に開始されたものではない、ということである。例えば、仙台に拠点を置く地方新聞社・河北新報社が刊行した文芸誌「東北文学」に掲載された次のような記事は、地方雑誌が何を母体として立ち上げられるのか、ということをめぐる事情をわかりやすく伝えていた。

疎開文学者疎開地で何かを成さうとする秋には既にそれは文学を媒介とする方法ではなくて舌と足を必要とするのであつた。これらの人々と文報の支部結成運動とがタイアップされて、相当の仕事をした乃至は仕事を期待できた人々がゐたのである。例へば、今井達夫の如きは四月上旬の疎開前に、屢々文報を訪れ中村武羅夫以下事務当局は地方活動の必要を力説し、福島に疎開するや直ちに県支部結成に努めたなどこの方面では殊勲甲と申さねばならない。[...]

文報の地方活動のうち県支部の組織前の一過程として県委員といふものを設定して支部結成準備を依頼したが、この中には疎開文学者として秋田の伊藤永之介、宮城の日比野士朗、群馬の南川潤、山梨の大江満雄（詩人）、長野の濱本浩等が地区活動を展開したものであつた。埼玉は終戦直前に支部結成式を挙げる予定であつたのを見合はせてゐるうちに大詔渙発となつたもので、既に秋月桂太の努力によつて実践運動に入つてゐたものである。諏訪の濱本浩も疎開するや地方事務所の無給囑託となつて講演に忙殺された中をよく働いたと言へるし、大江満雄も灰燼の町甲府で孤軍奮闘、空襲直後の宣撫工作に壁文芸を利用するなど文学の与える影響を

巧みに具現したものである。伊藤永之介や日比野士朗は委嘱されてから日尚浅く（しかし日比野のプランは終戦後東北文芸協会として実現された）、南川潤は上毛新聞に広告を出して会員名簿を作ったら終戦といふやうな悲運もあつたのである。（XYZ「文壇録音 話題の人々」、「東北文学」創刊号、1946年1月）

つまり、地方へと疎開した文学者たちは、望むと望まざるとに拘わらず、「文報」＝日本文学報国会の支部活動に関わることとなったのであり、そこである程度構築された組織が、そのまま彼らの戦後における文学活動の拠点となっていたという事態が、こうした記述から窺われるのである。

とりわけ、地方において活発な活動を展開したのは、地方新聞社を刊行母体とする地方雑誌だった。先に触れた「東北文学」（河北新報社刊）はその代表的なものの一つであるし、他にも「文華」（のち「北国文華」と改題、北国毎日新聞社刊）、「月刊にひがた」（新潟日報社）「四国春秋」（四国新聞社）などが挙げられよう。無論、これらの雑誌が活発な活動を展開し得た背景には、東北帝国大学・第二高等学校（仙台）や第四高等学校（金沢）の存在に由来するアカデミックな文化環境があったことには留意が必要であり、実際、寄稿者のラインナップには学校関係者の名前が散見される。しかし、これらの雑誌は必ずしもこうしたアカデミシャンによる地方文化の向上といったことのみを企図していたわけではないこともまた、誌面から明らかである。

さらに注目すべきこととして挙げられるのは、この時期の地方雑誌が、狭い郷土に密着し、その狭い共同体の中でのみ消費されていたわけではない、ということである。

例えば、新潟市に拠点を置く北日本文化協会という団体が一九四六年一月に創刊した雑誌「北日本文化」の場合、その創刊に当たっては前年の「十一月中には北海道、青森、宮城、福島、長野、富山と各地方新聞紙上を通じて芳志ある会員の参加を希つた」（「編輯後記」、1946・1）といい、実際その寄稿者の居住地は新潟県内に限定されていない。

また、この時期の地方雑誌においては、しばしば受贈雑誌一覧といった欄が設けられているが、こうした記述に注目すると、地方雑誌が狭い意味での「地方」の境界線を越えて、しばしば交流を行っていたという状況が可視化されてくる。例えば、「文華」の1946年6月号の「編輯後記」末尾に付された受贈誌一覧には6誌のタイトルが掲げられていたが、その中には岐阜県加茂郡古井町刊行の「若葉文藝」、福岡県久留米市刊行の「青年時報」といった雑誌が見出される。「北日本

文化」の場合も、創刊号（1946年1月）の「北日本文化だより」欄において「信州日報」（長野県飯田市）、「蚕業評論」（信濃毎日新聞社）、「新岩手婦人」（岩手県盛岡市）といった県外における地方雑誌の創刊・復刊情報が示されていた。

こうした動向について、とりわけ興味深い記述が見出されるのは、愛知県幡豆郡西尾町に拠点を置く「中部日本青年文学者会」の編集により刊行されていた雑誌「新樹」である。当時、郷里である長野県諏訪郡に疎開していた藤森成吉から寄せられた作品（「嚴冬」の総題のもと、俳句三句・短歌三首が並べられた）を巻頭に置き、1946年3月に創刊されたこの雑誌では、毎号掲載される「文学界短波通信」欄において、愛知県内や隣の岐阜県のみならず、東京や大阪といった大都市圏も含めた全国各地のメディア状況が逐次報じられ、さらには「地方雑誌時評」という欄も設けられていた。また、執筆者の顔触れも雑誌同人のみならず、創刊号において既に岐阜県の雑誌「蓑座」（岐阜文化連盟編集）の同人からの寄稿を受けており、近県同人誌の積極的な交流も行われていたことが窺われる。

また、1946年7月号において「同人雑誌の経営問題に就いて」と題した特集を生まれ、各地同人誌の責任者から寄せられた文章を掲載していることも注目される。原稿を寄せたのは、矢野朗（九州文学 福岡県福岡市）、藤原審爾（「文学祭」岡山県倉敷市）、佐々木荃三（「自画像」新潟県西蒲原郡燕町）および「葦」（帝国大学七曜会、東京都渋谷区）の編集室（無署名）であるが、彼らの言葉からうかがわれるのは、商業ベースで刊行される中央＝東京のジャーナリズムとは一線を画し、営利主義に囚われない良質な誌面を読者に提供することについての自負である。例えば、佐々木荃三が記すところによれば、「新潟県で刊行されていた雑誌「自画像」は、出版配給株式会社を通じて販売」された結果「大阪、愛媛、福岡」といった「各地の書店の店頭に出てゐる」のだという。

以上のような事例から見えてくることはつまり、地方雑誌のようなローカル・メディアは単に狭い「地方」の中で限定的に享受されるものとしてのみ存在していたのではない、ということである。むしろ、こうしたメディアに関わる者たちは、いわば中央のジャーナリズムに対するオルタナティブとして、ローカル・メディアを機能させようとしていたのである。

しかし、ローカル・メディアが簇生する状況は、必然的にある種の困難を抱え込んでいく。

例えば、明治期から岐阜県を拠点に「地方」発の文学に関する運動にコミットし続けた

作家・小木曾旭晃は、敗戦直後にも「地方文化」というストレートなタイトルの雑誌を創刊しているが、その誌面の中で小木曾は次のように記していた。

今日まだ地方に疎開してゐる知名文化人は多数に上るが、しかしそれらの人達その地方のためにどれだけ文化方面に貢献してゐるかといふ点になると、一概には言へぬけれども、いま仮に本県（引用者注、岐阜県）について言へば極めて少数でむしろ稀なりといった方が適当かも知れない。これは疎開者本人が自発的に出ないためか、或はその意思があつても地方人が無関心であるためか、何れにしても遺憾なことである。

[…]

地方で発行する新聞雑誌はなるべくその地方の人々の作品で飾るやうにしたい。それは地方文化の開発は地方人の力によつて為すべきであつて、それが最も効果的であるからだ。然るに地方雑誌の中にはさまで縁故もないたゞ単に中央に名ある人物だからといふのみで、それらの詰らぬ（多くは旧作か二度勤め物）を頂戴し紙面を虚飾してゐるなどは感心したことでない。（小木曾「文化界漫談」、「地方文化」1946年10月）

疎開文化人と地方の人間との交流は、必ずしも有効に機能するとは限らない。いつでもうまく機能するとは限らない。地方雑誌を満たすコンテンツは、必ずしもその地方の人々によつて書かれたものとは限らず、また読者のニーズもローカルなものに限定されてはいない。その結果、しばしば誌面は初志を裏切つて〈中央〉への憧れを語つてしまう。こうした小木曾の慨嘆は、多くの地方雑誌に共有されるものであつただろう。

例えば、「東北文学」（1946年6月）に掲載された舟橋聖一・桑原武夫・日比野士朗による鼎談「新文学の摸索」に見出される次のようなやりとりは、「地方で文学をやるといふこと」をめぐる困難を端的に物語っている。

桑原 […] 今の農村では、農民自身は忙しくて、文藝など出来ないだらうけれども、他のものがやつてゐてもいい目で見られないところがまだ多分にあるんぢやないか。文学をやつてゐるのは決して遊んでゐるんぢやないといふ、さういふ雰囲気をもつてやらないと、新人はなかなか出られない。出れば直ぐ景気のいゝ東京に行つてしまふ。

舟橋 農民は、東京で本を読んでゐることは仕事ぢやないと考へてゐる。朝から晩まで自分が食ふことだけに熱中してゐるんだから、それほど日本の農民は虐げられて生活が苦しい。生活以外に考へることがないほど窮迫してゐる。つまり農村には文化がないといふ

ことになる。そこが地方文化の運動をするのに重大な問題だと思ふ。

占領期における地方雑誌というメディアの活況という事態を、その可能性と限界の両面から捉え返すことで、〈戦後〉の言論空間の構築（再構築）のプロセスを追尾した上で、いわゆる「戦後文学」をメディア論的な観点から再考することは、今後の研究において不可欠の視点であるはずであり、本研究にはその基礎作業を行うものとして一定の成果を上げたことと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 大原祐治、雑誌「月刊にひがた」総目次（上）、人文研究、2013年3月、第42号、67-95
- ② 大原祐治、「小市民の幸福」と公共性—坂口安吾「中庸」から考える—、国語と国文学（査読有、2012年7月、89巻7号、53-68
- ③ 大原祐治、占領期におけるローカルメディアと文学者—坂口安吾を視座として、人文研究、2012年3月、41集、83-11
- ④ 大原祐治、モダニズムからの訣別—坂口安吾と同時代芸術—、人文研究、2011年3月、40集、31-57

〔学会発表〕（計2件）

- ① 「小市民の幸福」と文学—坂口安吾と戦後社会—、日本近代文学学会2010年度春季大会、2010年5月22日
- ② 占領期ローカルメディアと文学者、日本近代文学学会北陸支部2011年度大会、2011年12月3日

〔図書〕（計1件）

- ① 宮原琢磨、瀧田寧、古田智久、佐々木健一、合田秀行、坂口明、大原祐治、松山幹秀、菅野剛、岡隆、戸田誠之助、久保康則、高橋博樹 21世紀の学問方法論、2013年4月、日本大学文理学部／富山房インターナショナル、（*担当箇所：第6章 文学の方法論 「文学史の彼岸—「文藝春秋」創刊と大正期の文芸メディア—」）

〔その他〕

ホームページ等

大原祐治 web site
http://www.k5.dion.ne.jp/~y_u_j_i/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大原祐治 (OHARA YUJI)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：40554184

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし